
老革命家の新たなる覚醒

——『炎黄春秋』の批評と分析——

劉志琴

〈中国社会科学院近代史研究所〉

現代中国においては、改革開放以降民間の刊行物が現れ始めたが、これは民間の資金、人力、および自発的な計画が市場の定期刊行物へと向けられた結果である。共産党の伝統的観念に基づけば、新聞、雑誌は意識形態の領域に属し、それは国家と党の宣伝ツールであり、政府の投資、任命によるものであった。つまりは官営の事業機構であり、民間の参与する余地は無かったといえる。そのため、民間の刊行物は前世紀の80年代になって出現し、まず改革開放以降の比較的寛容となった環境によって推進力を得たのである。民間の刊行物は依然として、中共宣伝部の指導と規範の制約を受けているとはいえ、結局のところこれは官営のものとは異なる民間の組織であり、このことは民間の力が国家体制の外においても存在し、また発展することが可能であり、中国の現代化には民間の力を大いに喚起して体制の改革を促進することが必要だということを示している。このため、その意義は刊行物それ自体にとどまらず、体制の刷新、さらには大陸における改革と大陸の思想史上にも重要な一石を投じることとなる。

目下この種の民間刊行物は、雨後の竹の子の如く続々と現れて来ており、急速な発展を遂げてはいるが、大多数は営利目的のものであり、商業性、娯楽性が強く、純粋に思想あるいは学術的な民間刊行物に属するものは非常に数少ない。またたとえ数少ないながらもこのような刊行物があるとしても、長期にわたって存在することは困難となっている。社会文化批評を標榜した『東方』雑誌も1993年に創刊された後わずか3年で休刊に追い込まれた。現在、大衆の中で非常に高い声望を獲得し、独立した活動を行いつつも大きな成果をあげているものとしては、『炎黄春秋』のみが挙げられる。

これはまた別種刊行物に属しており、別種と呼ばれるのはこの刊行物が“現実を重んじ、真実を記す”ことを旨とし、“歴史的事実こそが最大の権威であり”、“事物および人間と向き合い、事実と真実を語り、客観と公正を求め、実践的検証と歴史的検証に耐え得る”ことを唱導しているからである。春秋筆、古今談、他山石、古鏡台、群言堂、求实篇、英傑譜、殞星篇などのコラムをもって歴史、特に現代史の真相を提示するような姿勢からも歴史を論じることを主体とした総合的な月刊誌であり、また非常に強い現実性と広く大衆に開かれた性質を持つことが分かる。さらに重要なのは刊行目的について、お上に迎合せず、権勢に迎合せず、筆のおもむくままに書き、歴史の真相を追究することを本分とする方針について冒頭で触れていることであり、大陸では非常にめずらしいケースである。

『炎黄春秋』（以下炎黄と略す）は1990年に創刊され、毎月を1期とし既に133期まで出版され、2800以上の文章1600万字以上におよぶ。非常に良い評価を大衆の中でも獲得し、多くの読者から、「每期必ず、すべて読んでいる」、「一冊を十数人から数十人には見せなければならぬくらいの価値がある」、「老若男女を問わず読め」などといった声が聞かれる。ある者はそれを受け取ってから「寝食を忘れて最後のページまで一気に読み」、ある者は自ら目録を作成して他者の検索の便を図り、またある者は自ら合本を作り友人間で回し読みするほどである。天津の古書市場ではこれを取り揃えることで顧客から歓迎を受けている。ある姉妹紙などは、どうすれば真実を語るといったことが可能となるのか教えるを請うために訪れたりもしている。大陸における宣伝を主とした新聞・雑誌の多くは政府によって注文されるが、『炎黄』は完全に自費による予約購読であり、このような『炎黄』を信奉する定期購読者は既に7万人にも達しようとしている。

このように大衆の歓迎を一身に受けた刊行物ではあるが、その道は決して平坦なものではなく、2001年のその雑誌社社長の言葉によると、「十年来、物事や人について語ろうとする時には、絶えず真実を語るべきか否かという困惑があり、時には非常に厳しい立場に置かれた」という。もしその他の刊行物がこのような困難に出会ったら、とうの昔に鳴りを潜めていたかもしれないが、『炎黄』は風にもまれ雨に打たれようとも微動だにしなかった。その重要な理由の一つは、これが既に引退した党、政治、軍部の指導者層によって発起されまた支持された刊行物であり、そこには軍部の上将、國務委員、中共顧問委員、宣伝部長、安全部長、省委書記、および新聞出版所所長、光明日報総編集長、新華社党委書記など文化界の要人が含まれ、彼らは既に権力の中心から遠ざかったといえども未だに影響力を持っており、特に民生問題に関わることで、彼らの大衆の中における威信を上昇させ続けていたからである。刊行物はさらに得がたい作者陣を抱えている、例えば李銳、師哲、蕭克、李德生、伍修權、莫文驊、于光遠、任仲夷などであり、その中には長期にわたって中央あるいは地方の指導者を務めた老革命家もいた。彼らは皆、政治上層部の動態といくつかの重大事件の当事者あるいは証人であり、ほとんど例外なく“左傾”主義の迫害を受けており、左派の害が人々に与えた甘苦を痛切に理解しているため、自らの経験から替え難い一次資料を提供し、歴史の靄を勇敢にも振り払い、真相を白日の下に曝け出すことができるのである。

これらの党、政治、軍部の指導者達は学術界に対して深い思い入れがあり、元中国共産党顧問委員の杜潤生は、「現在中国社会には、こんなにも知識分子や歴史に通暁した文化人達がいるが、彼らには発言の場と活動の空間が必要である」、「人民の基本的権利を保障する上で最も重要なのは、言論の自由、学問の自由、財産保障制度である」と明確に述べている。多くの著名な学者、例えば戴逸、張豈之、李学勤、馮其庸なども皆、この中に加わっており、このような党・政・軍の各界の要人が連合し、彼らが共同して支持および組織した刊行物は、中国において第一に位置するものである。

この刊行物の影響のうちでさらに重要なのは、ここから思い切って真実を語る勇気と精

神がもたらされたことである。真実を語るができるかどうかは、中国では大きな難題であり、前世紀の50年代以来、何度も繰り返された政治運動、繰り返された右派および右傾日和見分子の誕生、これらの大多数は真実を語ったが故のことであった。真実を語った者は地獄に落ち、そうでない者がとんとん拍子に出世する。誹謗、中傷が世の中を席卷し、人々に憎しみを生ませたが、『炎黄』は正に真実を語ることによって衆望を勝ち得たのである。

真実を語る上で最も難しいのは、共産党の過ちやそこから得られる教訓に対して痛烈な反論を行うことである。正に雑誌社社長の言う「我々の党について語る時には、ただその成功と経験についてのみ語るができ、もし欠点や過ち、そこから得た教訓について語るとすれば、それは自らの顔に泥を塗るようなものである。総じてこのような一方的で非科学的な態度は、非常に長いこと我々の意識形態を支配しており、史学の領域ではそれが極めて顕著である。このような状況は、中共十一期三中全会以降大きく変わったが、非科学的な物の見方という意識構造は今日に至っても依然として存在している」ということである。『炎黄』はこのような困難を前にして、まず無実の罪を着せられた中央指導者である劉少奇、張聞天、彭德懷、黄克誠、瞿秋白、李立三、項英、潘漢年、陳昌浩などに対して細やかな検証を行い、闇に隠れていた部分に光を当て、彼らの真の功績を明らかにした。1989年以降中国の新聞・雑誌は既に胡耀邦を取り上げることなどなかったが、『炎黄』は1994年4月に、まず胡逝去五周年記念詩文を掲載し、続いて胡耀邦の推進した思想解放についての論文を掲載し、無実やでっち上げの中から輝かしい功績を系統立てて再評価し、読者の賞賛を受けた。また文革中迫害されて命を落とした中央各部の長官や省委書記、例えば閻紅彦、江渭清、衛恒、陶勇、万曉唐、張霜之などの冤罪を晴らすだけでなく、一般大衆の正義を貫いた姿勢を描く文章も掲載された。いくつかの政治運動の真相については、はっきりと事の次第、さらには歴史の本来の姿を示した。1958年から1962年まで、中国は大躍進の熱狂、廬山会議の反右派闘争および七千人大会といった大きな変化を経験する中で、多くの不可解な謎が残されたが、「徐水 夢幻の天国」、「大躍進時代大西北の嘘」、「最も早く農家生産請負制を訴えた二人の若者」、「廬山会議における張聞天の抗争」、「“七千人大会”の勇氣と遺憾」などが『炎黄』のシリーズ論文として発表されたことにより、中央から底辺に至るまでの歴史の真相が示された。「李維漢、失敗から教訓を得て反封建を唱える」、「李鋭による政治体制改革の提議」、「中央の戦略決定に対する粟裕の率直な異議」、「陸定一による“百家齊放・百家争鳴”の方針推進の経緯」、「“共同食堂”の盛衰から生まれた思考」および馬寅初、王造時などの人物に対する再評価を行い、共産党内外の一世代上の人々が自由民主の実践と理論を追求した思考を如実に反映させ、これらの人々の目を覚まさせるような文章は、読者によって“世の中を覚醒させる名作”として称えられ、一世を風靡した。

『炎黄』が敢えて人が口にしないような言論を発表することについて、ある者は自らの秘めた憂いを述べている。李普は、「蕭克將軍はこの雑誌の魂であり支柱である。聞いた

ところによればいくつかの大変優れた文章も、彼に認められてはじめて掲載されるという。書きながら私には突然奇妙な考えが浮かんだ。もし蕭将軍がいなければ、我々は今このような『炎黄春秋』を目にすることができるだろうか」と述べている。

このような秘めた憂いは余計な心配かもしれない、なぜなら現在共産党内には既に老革命家の新たなる覚醒が見られるが、彼らは青少年期から共産党に付き従い、党の事業に忠誠を誓い、長期にわたって党の利益を重視するという姿勢に慣れており、また程度は異なるものの専制主義の影響を受け、党の従順な道具となっており、個人の自主的な意識というものがめったに見られないからである。文革の災禍と共産党の度重なる過ちは、彼らに信仰の動揺を経験させ、それによって奔走の果て再組織化が起こり、自我を取り戻し、彼らが若年の頃に追い求めたそして一度は失った民主の旗が再び掲げられ、社会主義伝統体制の弊害を痛感し、そのため全力で革命を追求させた。しかし長期にわたる革命人生は、党の運命と彼らの人生を一体化させ、彼らの一見反動的とも取れる言行も、すべては最小限の代価で体制内部から中国の民主化を推進しようという意図をもったものであった。このことは共産党民主派の決起を示し、それは党内の冷静かつ賢明な回復作用となった。これらの老幹部にとっては、『炎黄』は正に新時代の新たなる覚醒を体現する作用を持つものである。正確に言えば、彼らは共産党の支持派であり転覆派ではなく、決して自由主義者ではなかった。しかし中国の自由主義が未だに確固たる足場が固められていないという状況下であって、彼らは程度こそ異なるものの自由主義の代弁者となっており、これもまた『炎黄』の支持者である李慎之が自由主義の指導的人物になったことが原因となっている。これは歴史の食い違い、そしてまた現実の作用と対比させた結果である。

『炎黄』の13年の業績は、その発展が重要人物の個人的な影響を受けただけでなく、全国民的な作用を凝集させたものであり、当局はその存在を軽視することはできない。この刊行物が再び困難にぶつかることがあっても、上級主管部門は、『炎黄春秋』を休刊とすることはできない、仮にそうするとすれば政治事件に発展する可能性がある」と言わざるを得ない。既に制御することが不可能なほどの勢力となり、如何ともし難いという状況は、その価値が中国革命史上永遠に輝きを放つことを示している。

(原文は中国語。邦訳 磯部美里)